



山登如

2021年度 付中通信 11号

修学旅行って何？

2021.11.26（金） 高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

コロナ禍が始まって修学旅行ができるかどうか、日本中の学校が共通に悩んだ問題だった。それは過去形ではなく、今も悩みは続いている。本校は中高6カ年で1回の修学旅行を長年に亘り実施してきた。その修学旅行は高校1年生の学校行事に位置づけられているので、幸い中学校としてこの問題に悩まされることはない。

しかし、6カ年の前半課程の責任者としてこの問題から逃れることはできない。そして、旅行先が海外ということなので、1年近く前にはもう覚悟を決めなくてはならない。国内ならば、予定の日取りにもっと近づくまで様子を見ていただけるけれど、決断をあっという間に迫られる感じになる。

それで、結局今年の六年制普通科高校2年生は3度も延期した挙句、国内旅行となって、北アルプスの立山黒部アルペンルートを中心とする、純日本風とも言える修学旅行に旅立った。この学年は元々人数が少なく、もう5年間も一緒に過ごしてきた仲のよいクラスだったが、どう



やらこの旅を通してさらに仲間意識が強まり、一体感が増したという報告が寄せられた。

となると、国内に決まってしまった時には、ずっと待ち望んでいたオーストラリアの修学旅行に未練を残す発言も上がっていたらしいのだが、終わってみると、国内もまんざらでもない、ということで意外なほど高評価となった。

もし、渡豪していたら、否が応でも姉妹校交流が旅の中心に置かれ、全体交流とバ

ディーとの個別交流でその準備も大変だが、現地でも緊張したり息を抜けなかったりと、たぶん、日本のクラスメート同士でのんびり過ごす時間は多くは取れなかっただろう。そういうことが、国内旅行を経験して初めて分かったのだ。せっかく海外に行くのだからと、そのコスト面でどうしても費用対効果を考えてしまい、これまでずいぶん詰め込み、その分大きな成果も期待してきた。もちろん、その甲斐あって、海外修学旅行として完成形だったと胸を張って言えるところもある。

ところが、生徒たちの満足度を測った場合、どちらがふさわしかったのだろうか、一概に判断できない気持ちも強くなった。そこで、修学旅行っていったい何？という問いが改めて去来するようになったわけである。日頃の学校生活では体験できなかったらう友だちとの時間、その中で、5年間の成長をお互いに意識しながら過ごす、そしてその縁に思いを巡らしたり、人生の不可思議に思い至ったり、そういう時間を提供する役割も、「修学旅行」ならあると言えるのではないだろうか？